琉球大学学術リポジトリ

《音楽科》音楽に対する感性を働かせ、音楽で語り合える生徒の育成：音楽的な見方・考え方を働かせるための授業デザイン

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属中学校
	公開日: 2020-06-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 下門, 健吾, 小川, 由美, 村田, 昌己
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/46007

音楽に対する感性を働かせ、音楽で語り合える生徒の育成

― 音楽的な見方・考え方を働かせるための授業デザイン ―

下門健吾*　小川由美**　村田昌己**
*琉球大学教育学部附属中学校　**琉球大学教育学部

Ⅰ　主題設定の理由

科学技術の飛躍的な発展に伴い、人々の生活は急激に変化している。そして今後も加速度的に変化するといわれる社会を見据えたとき、学校教育が子どもたちに身につけさせるべき能力とは何だろうか。その大きな“問い”と向き合い、本校では「21 世紀型思考力の育成」をめざし 3 年計画で研究を進めている。本校の定義する 21 世紀型思考力については、本紀要の総論を参照いただきたいが、現在求められている「21 世紀型能力」について国立教育政策研究所は「学校生活全体、全ての教科や領域等を貫いて育てたい資質・能力」（社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理 2013 年）だと述べている。また、今回の学習指導要領改訂は、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）の推進が求められている。そこでは各教科の「見方・考え方」を働かせることが深い学びを実現するための鍵といわれており、音楽科においてもそれは同様である。音楽科では①感性を働かせ他者と協働しながら音楽表現を生み出したりすることに加え、②音や音楽と自分との関わりを築いていけるよう、生活や社会の中の音や音楽の働き、音楽文化についての理解を深める学習内容の充実が求められている。そして前述した「見方・考え方」を働かせることにより、生徒自らが「音楽」と「社会」とをつなげ、そこで「学ぶ意義」を見出し、それにより生徒一人ひとりの学びに対する主体性の向上が期待できる。つまり、音楽的な見方・考え方を働かせる授業をデザインすることにより、昨年度の音楽科の課題であった「音楽を感覚だけで捉えるのではなく、自分の考えを音楽で語れる力の育成」（＝昨年度研究の課題解決）、ひいては音楽科の目標である「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」の育成につながると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究の目的

本研究では、音楽的な見方・考え方を働かせるという視点で授業改善を図ることにより、生徒が音楽的な感性を働かせ、音や音楽そのもの、または音や音楽にかかわる言葉で語り合える力を育成することを目的とする。

Ⅲ　目指す生徒像

感性を働かせ他者と協働しながら音楽表現を生み出し、生活や社会の中の音や音楽の働き、音楽文化についての理解を深めて、音や音楽と自分との関わりを築いていく（または築いていこうとする）生徒。

Ⅳ　研究内容

本研究では、生徒が①感性を働かせ他者と協働しながら音楽表現を生み出し、②生活や社会の中の音や音楽の働き、音楽文化についての理解を深めて、音や音楽と自分との関わりを築いていけるようにするために、次の 3 つの視点に沿って授業をデザインしていく。さらに、これら 3 つの視点によって、目指す生徒像が達成されているかについて、授業での生徒の発言やワー

クシートへの記述内容、生徒がつくった旋律などを、3つの視点に沿って分析、検証し、音楽的な見方・考え方を働かせる生徒の育成につながるような授業へと改善する視点を見いだしたいと考える。

【感性を働かせ他者と協働しながら音楽表現を生み出すための手立て】

(1) 実感を伴った理解

生徒たちが、音楽に対する自身の思いや考えを「音や音楽」または「音や音楽にかかわる言葉」で互いに語り合うためには「知識の習得」が必要不可欠である。「知識の習得は、単に新たな事柄を知ることのみに留まるものではない」と新学習指導要領で謳われているように、教師が一方向的に知識を伝授するだけでは不十分である。学習の過程で生まれる生徒の疑問を出発点とし、興味関心を高め、最終的に生徒自身が「納得」することが大切である。「なるほど！」という納得があってこそ、音楽科における表現や鑑賞に生かせる知識になり得るのではないだろうか。これこそが、新学習指導要領で明示された「実感を伴った理解」だと筆者は捉えている。

本研究では、表現に生かすことができる知識の習得のために、「調和する音」と「調和しない音」との違いを鼻歌を用いて感覚的に選択させた後、生徒が「調和している音」として選択した音が、和音の構成音になっていることに気づかせる場を設ける。それにより、生徒の感覚と結びついて調和する「和音の響き」をつかませる。また、生徒が創作した旋律を取り上げて比較することで、音と音とのつながり方によるイメージの違いを知覚・感受させる場を設定し、イメージに合った工夫に生かせる知識を獲得していけるようにする。

(2) 音と言葉によるコミュニケーション

研究主題にある「音楽で語り合える」には、①音や音楽そのものによるコミュニケーションと、②音や音楽を核とした言葉によるコミュニケーションの両方が含まれている。つまり、生徒たちがもつ音楽に対する思いや考えを「音や音楽そのもの」や、「音や音楽にかかわる言葉」で互いに語り合うことを意味している。「なんとなくこちらの方が好き」という類の抽象的な言葉による語り合いではなく、音楽の諸要素に対する知覚・感受を通して、音楽の用語を使いながら語り合うことが重要な視点である。

また他者と協働しながら音楽表現を生み出すことも重要な視点である。本研究では男女混合の3名で班を編成し、3名それぞれに役割を持たせ、互いに関わり合い、語り合えるような場を設定している。例えば題材前半では①和音を弾く人、②鼻歌を歌で調和する音を探す人、③鼻歌で探し出した音をキーボードで確認する人、また題材中盤からは①伴奏を弾く人、②伴奏に乗せて鼻歌やキーボードで旋律をつくる人、③仲間がつくった旋律について音楽的な要素と表現したいイメージとの関連の視点で意見や感想を述べる人というような役割の分担である。集団の中で役割を担うことで、個人が責任を持つようになる。また自分が創った旋律を「聴いている人がいる」ことによって、そこに旋律を介した語り合いが生まれ、生徒は新たな視点から自身の旋律を再考し、その繰り返しが学びを深めることにつながると考える。

【生活や社会の中の音や音楽の働き、音楽文化についての理解を深めて、音や音楽と自分との関わりを築いていけるようにするための手立て】

(3) 実生活と学びをつなげる

新学習指導要領において掲げられている音楽科の目標は、「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」を育むことである。音楽的な見方・考え方とは、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること」である。

人はなぜ、音楽をつくるのだろうか。中学校における「創作」の学びが、生徒にとっての「自分事」となるためには、どうすればよいのだろうか。この問いが、実生活と学びをつなげる鍵になると考え、「卒業式」というテーマを取り上げた。中学生となって、学校生活の中で先輩と関わり合うことが多くなる中学1年生にとって「先輩のために何ができるか」「先輩の思いに寄り添い、卒業式の雰囲気に合う音楽とはどのようなものなのか」という視点から旋律を考えることで、「表現したいイメージ」と「音楽を形づくっている要素」とをかかわらせ、音と音とのつながり方や曲の構成を試行錯誤しながら旋律をつくる学習を深めることができるの

ではないかと考えた。儀式的行事のねらいは「学校生活に有意義な変化や折り目を付け、厳粛で清新な気分を味わい、新しい生活の展開への動機づけとなるようにする」ことである。そのような卒業式という社会的な「場」にふさわしい音楽を意識させることで、生徒達の中に音楽を介した他者意識が生まれるのではないか。例えば「卒業生の寂しい思いを表現したいから旋律の動きをこんな風に工夫したい。」「明るい未来に向かって堂々と歩んでほしいから、このような旋律にしたい。」というようにである。そこを出発点として生活と音楽との関わり、自分自身と創作活動との関わり、そして自分自身と音楽との関わりを考えさせ、気付かせられたらと考える。

V　授業実践

1　1学年実践事例

(1)　題材について

題材名：卒業式の雰囲気に合う音楽をつくろう

対　象：1学年

教　材：音と音とのつながり方や曲の構成を意識した旋律づくり

(2)　題材の目標

和音の響きに合う音を選択し、旋律の動きや曲の構成と自分たちのイメージとのつながりを捉え直しながら、表現したいイメージに合った簡単な旋律をつくることができる。

(3)　本題材で育成したい資質・能力

①　知識・技能

和音に合った音を選択し、音と音とのつながり方や曲の構成の違いを知覚・感受しながら、イメージに合う旋律をつくる力

②　思考力・判断力・表現力等

旋律を音と音とのつながり方や曲の構成の視点で捉え、表現したいイメージに近づくよう工夫する力

③　主体的に学習に取り組む態度

どのような音楽が表現したいイメージに合うかについて考え、それにふさわしい旋律の動きや曲の構成を考えようとする態度

2　本実践の目的

音と音とのつながり方や曲の構成によって生み出される曲想を知覚・感受し、表現したいイメージを他者と共有しながら協働して旋律を創り上げる過程において、生徒の音楽的な感性を働かせ、音や音楽そのものや音や音楽にかかわる言葉で語る力を育成することを目的とする。

3　実践内容

(1)　学習指導要領との関連

A　表現(3)創作

ア　言葉や音階などの特徴を感じ取り、表現を工夫して簡単な旋律をつくること。

イ　表現したいイメージをもち、音素材の特徴を感じ取り、反復、変化、対照などの構成を工夫しながら音楽をつくること。

表1　本題材で扱う共通事項

旋　律	音と音とのつながり方 （順次進行、跳躍進行）
テクスチュア	和音
リズム	リズムパターン （拍を分割する、休みを入れる）
構　成	反復、変化、対照

(2)　題材の評価規準

○音楽への関心・意欲・態度

表現したいイメージと音のつながり方や曲の構成などとの関連に関心をもち、それらを生かし音楽表現を工夫して音楽をつくる学習に主体的に取り組もうとしている。

○音楽表現の創意工夫

音のつながり方や曲の構成を知覚し、それらの働きが生み出す特徴や雰囲気を感受しながら、どのように音楽をつくるかについて思いや意図を持っている。

○音楽表現の技能

創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身につけて音楽をつくっている。

表2　具体の学習活動における評価規準と評価方法

第4時　第3時～	関	①旋律や曲の構成の違いに関心を持って聴いたり、違いについて言葉にしたりしている。【観察・発言】

	創	①旋律や曲の構成の違いを知覚・感受して、その違いについて言葉にしている。【発言】
	技	①表現したいイメージに合った音のつながり方・リズム・旋律の順番（曲の構成）を選択することができている。【楽譜・録音】
第5時～第8時	関	②イメージに合った曲の構成を意識して、16小節の旋律創作をしている。【観察】
	創	②どのような音楽をつくるかについて話し合い、旋律や曲の構成をイメージに合うように工夫している。【観察・発言・シート】
	技	②表現したいイメージに合った音のつながり方・リズム・旋律の順番（曲の構成）を選択することができている。【楽譜・（代理を含む）演奏】
第8時	創	③クラスの仲間がつくった旋律や曲の構成の特徴を知覚・感受している。【発言・シート】

(3) 学習活動

以下の表3のように題材計画を立て授業を進めた。

表3 題材計画（全8時間）

第1時	めあて：卒業式の雰囲気に合う音楽とは？
	・過去の卒業式での「答辞」の場面の音声を聴き、誰に対するどのような思いなのかを考える。 ・教師が創作した音楽を、答辞の音声と共に鑑賞し、雰囲気の変化を感受する。 ・班で役割を分担する。 ・コード進行の伴奏を弾きながら、それに合う音を鼻歌で探し始める。
第2時	めあて：旋律の骨格となる音を探し旋律の流れをつかもう。
	・コード進行を再度確認し、グループで協力し和音に合う音を探す（前時の続き）。 ・和音の構成音について考える。 ・先に進んでいる班の旋律をひとつのモデルとして共有し、活動の見通しを持つ。（※必要に応じて）
第3時	めあて：旋律の骨格となる音を探し旋律の流れをつかもう。
	・いくつかの班の旋律をつなぎ合わせたものを、教師が演奏し、聴きとる。 ・一人一人が創った旋律をつなげて、班全員で4小節の旋律を創作する。
第4時	めあて：あなたの表現したいイメージに合うのは、どのような旋律？～曲の構成や、音のつながり方の特徴に着目して探してみよう～
	・創作した旋律や、創作途中段階の旋律をつなぎ合わせた旋律を聴く。（演奏は教師が行う） ・各班の旋律の違い（音と音とのつながり方）を知覚・感受し、旋律の並べ方（曲の構成）によるイメージの違いを交流する。（比較聴取）音のつながり方の特徴、リズムの変化、構成など。 ・全体で共有した工夫や得た知識を生かし、曲の大枠について話し合い曲全体のイメージを考える。
第5時～第	めあて（第4時と同様）
	・「16小節の旋律創作」をスタートする。 ・答辞の音声に合わせて演奏し、イメージに合っているかどうかを確かめる。 ・旋律の創作意図を、班でまとめる。
第8時	めあて：仲間の創った旋律を鑑賞し、その工夫や違いを味わおう
	・班ごとに創作意図を説明し、演奏する。

4 実践の考察

(1) 実践における生徒の姿

ここでは、授業デザインの3つの視点、(1)実感を伴った理解、(2)音と言葉によるコミュニケーション、(3)実生活と学びをつなげる、のそれぞれに関わる生徒の姿を見ていく。(1)～(3)の視点に沿って見ていくと、（ア）実感を伴った理解をみせる生徒の姿、（イ）音と言葉によるコミュニケーションをはかる生徒の姿、（ウ）音楽を実生活とつなげる生徒の姿、が見られた。以下、その詳細を述べる。

（ア）実感を伴った理解をみせる生徒の姿

今回、まず骨格となる旋律をつくるために、教師が提示したコード進行（例：C→G→Am→Em…）に沿って、生徒が感覚的にコード（和音）に合うと感じる音を探す活動から始めた。ここでは、コード（和音）の詳しい説明を教師から長々とすることはせず、まずは生徒自身に自らが感覚的に調和すると感じられる音を探させた。そうすることで、色々な音を試していきながら、コード（和音）に調和する音とはこういう音かなと次第につかんでいく生徒の姿があった。その後、各コード（和音）の構成音を楽譜で提示し、生徒たち自身が選んだ音との関係を確認させることで、生徒自身が調和すると感じた音のほとんどがコード（和音）の構成音の中にあることに気付き、コード（和音）に調和するということがどういうことかを理解していく姿がみられ

た。またセブンスの響き[1]になるような音を選んだり、あえてぶつかるような音を選んだりする生徒も見られ、実際に「音」を鳴らし、聴き合い、仲間同士でその価値づけを行うことで、構成音ではなくても調和する音があることにも気付き、あまりにも調和しない音は場の雰囲気に合わないと自分たちで判断していった。そうすることで、生徒は卒業式に合う音楽をつくるには「調和する音」を選ぶ必要があるということに実感をもって知覚・感受（認識）し、ちょっと雰囲気を変えたいと思えば場の雰囲気を壊さない程度の逸脱も許されるということを、身をもって理解することができた。また、第4時の比較聴取の活動以降の旋律創作においては、表4のように、場の雰囲気や心情の変化を表現するために順次進行と跳躍進行、上行形と下行形を使い分けたり、曲の統一感や卒業生の複雑な思いを表現するためにリズムパターンを変化させたり、様々な思い出をふり返る場面を表現するために反復や変化、対照といった曲の構成を工夫する姿が見られた。これは、実際の「音」を介して実感を伴った理解をすることで知識を習得し、その後の活用場面においてもそこで得た知識を活用し試行錯誤する姿であると言える。

表4　表現したいイメージと音楽の諸要素との関わりが見られる生徒の楽譜メモ欄への記述

順次進行と跳躍進行	・順次進行を多く使い、なめらかでやさしい感じにすることで、気持ちをあらたにがんばろうというイメージで仕上げました。
	・順次進行から急に跳躍進行を使うことで、卒業式で卒業生のこみあげてくる思いを表現するように考えました。
音の高低	・下行形を使って暗い感じにした。「ミ」より低い音を使うことで、悲しい雰囲気になるようにした。
	・静かな雰囲気だから4分（音符）を基本にしてどんどんゆっくりにしていった。2小節目から2小節目にかけて上がっていくのは、これから卒業式が始まる期待、しかし卒業してしまうという寂しさを4小節目に下げることで表現した。
リズム	・8分音符で、気持ちがこみ上げてくる感じを出した。
	・リズムの分割をあまりしないように2分音符を使うことで、卒業生の切ない気持ちや、在校生たちの悲しい気持ちを表現しました。
	・最後の日だから、思い出とかを思い出しながら少し悲しい気持ちになっているから2分音符を使ってゆったりとした感じにした。
曲の構成	・反復を使って、1段目と同じ旋律にすることで、卒業式の最初と同じ、少し嬉しいけどみんなと別れるのはさびしい気持ちを表現しました。
	・順次進行を使い音を分割することで、1，2段目よりも明るく、楽しかったことを考えているような感じにした。2段目と対照的にした。
	・1段目と2段目で反復したので、3段目では変化をつけるために音と音のつながり方を上行、下行にしたり、音符を少し変え、リズムを変えたりして1段目と2段目と対照になるような旋律にした。

（イ）音と言葉によるコミュニケーションをはかる生徒の姿

本実践を通して、1台のキーボードを囲みながら音と言葉を介して「この音でいいのか」「この旋律でいいのか」という問題を解決するために積極的にコミュニケーションをとる生徒の姿が見られた。例えば第3時において、より表現したいイメージに合う旋律にするために「リズムを変化させる」必要性を実感した生徒たちはキーボードを鳴らしながら、班員同士交流し、旋律へと変化させていく姿が見られた。また第4時の比較聴取の活動の中で、音と音とのつながり方や曲の構成によるイメージの変化を捉えた後、班で活発に意見を交流させ、曲全体の流れやイメージと、それを表現するための音楽的な工夫について話し合う姿が見られた。第5時以降には、それまで直観だけで音を探し、何となく旋律を創っていたものが「表現したいイメージ（曲の流れ、ストーリー）」が明確になることで表現意欲がかきたれられ、「はやく旋律をつくりたい」「あんな風に旋律をつくりたい」という思いが膨らみ、さらに表現するための具体的な方法や知識（音と音とのつながり方や構成の工夫）を獲得したことで、実際に生徒同士のコミュニケーションが活発になった。それまでは「音楽は苦手。難しい。」と言い、対話が少なかった班の生徒も、互いに「ここはどうする？」「これ、どう思う？」などと、主体的、協働的に創作活動に取り組む姿が見られた。

（ウ）音楽を実生活とつなげる生徒の姿

第1時では、過去の卒業式の答辞を聴かせ「このような思いや場の雰囲気を高めるために、私たちができることはないか」と問いかけることで、生徒から「音楽

1　ソ・シ・レ・ファで構成されるハ長調のV_7の和音

で高められる」というこたえが返ってきた。また教師がつくった音楽（BGM）にのせて答辞の音声を聴かせると「うわー」という感嘆の声と共に生徒たちの表情が変化した。音楽によって場の雰囲気が変わり、答辞に込めた卒業生のメッセージが深く生徒たちの中に入っていく様子があった。卒業式をテーマに学習課題設定をしたことで、生徒が音楽と実生活とのつながりに気づき、現実感（リアリティ）をもって学習活動を捉え、主体的に学習に臨む姿勢が見られた。今の自分たちの生活に直結する音楽の役割を意識し、卒業生を送り出す場に、自分達が「音楽」という側面から貢献できることを意識させることは、「学んでいること、学んだことの意味や価値」を自覚させることにつながった。

(2) 3つの視点を意識した授業デザインの成果

前項(1)で示した生徒の姿から、本題材においては、授業デザインの3つの視点に沿った手立てにより、次のような生徒の姿を引き出せたことが見えてきた。

（ア）自らの感性を働かして音を選択し、選択した音やその音の組み合わせによって生み出される雰囲気の違いについて、実感を伴って知覚・感受することで、旋律を創作するのに必要な知識を習得していく姿。また獲得した知識を活用し、表現したいイメージに合うよう音と音とのつながり方や曲の構成の視点で試行錯誤する姿

（イ）表現したいイメージが具体化され共有されたことで、音楽が苦手な生徒も含めて仲間と共にイメージを表現したいという意欲をもち、「音」や「音にかかわる言葉」による対話を通して主体的・協働的に創作活動に取り組む姿

（ウ）自分たちが生きている現実世界と音楽との接点を見いだし、旋律創作に意欲的に取り組む姿

(3) 生徒の姿から見えてきた課題と授業の改善点

3つの視点を意識した授業デザインにおいて一定の成果が得られた一方で、課題も見えてきた。それは、

（ア）実感を伴った理解において知覚・感受したことと音楽用語をしっかりと結びつけていく点において不十分さがあったことである。また、理解した音楽の諸要素を正しく記譜していくことも、音楽活動を広げる上で重要な知識・技能となるが、その点においても不十分さが残った。さらには、生徒の変容を見とるという点においても課題が残ったと考える。以下に、課題の内容とそれに対応した授業の改善点を示す。

（ア）知覚・感受や用語理解を促す授業改善

卒業式の場面に合う音楽にするために、どのような音楽的特徴を用いればよいかを理解して語る生徒がいる一方で、表5のように音と音とのつながり方や曲の構成によって生み出される曲想を知覚・感受することが不十分、または用語の理解が十分でないため、表現したいイメージと旋律をつなげて考えられていない生徒の姿が見られた。生徒に自身の思考を整理させるための手立てが必要である。

表5　表現したいイメージと音楽の諸要素とのつながりが十分とは言えない生徒の楽譜メモ欄への記述

生徒の記述内容	課題点	課題の分析
最後だけ暗くなるように工夫しました。	何が暗いのかがわからない。	下行形の旋律にすることで、暗い雰囲気を表現したかったのだろう
暗い感じから明るい感じに。	何が暗くて、明るいのかわからない。	上行形の旋律にすることで、明るい感じを表現したかったのだろう
サビに向けて音を変えて少し明るい感じにした。	音をどう変えたのかという記述が不十分。	音の高低を高くしリズムを細かくすることで少し明るい感じを表現したかったのだろう
曲の山をつくる。	前段とほとんど動きが変わらない。	「曲の山」をつくるための「音楽的な知覚・感受」が不十分。または「曲の山」の理解が不十分。
4段のうち、すべての段の旋律を変化させている。	「作品」としての統一感に欠ける。	反復することによる曲全体としての統一感を、知覚・感受させきていない。

知覚と感受を結び付けられていない生徒への手立てとして、例えば、表現したいイメージ（感受）とそのための工夫（知覚）を線で結ぶ方法を用いることも検討していきたい。これは生徒の思考を整理するという意味でも必要であると考える。このような手立ては、すでに鑑賞の授業で実践しているものだが、創作や歌唱活動においても活用できる手立てであり、生徒の音楽的な見方・考え方を深めるために必要な手立てであると考える。また、生徒が知覚し、感受したことをふまえて、再度音楽で確認し、生徒が音や音楽の諸要素をつ

かめた適切なタイミングで音楽用語を提示することも重要であると考える。そうすることで、生徒は音や音楽そのものを通して、より実感を持って理解することができるようになるだろう。

（イ）記譜法に関する理解を促す授業改善

創作した旋律を記譜する際に正しい記譜法で記譜することができない生徒も見られ、その中でも特に「リズム」が、生徒自身が意図したものと記譜された楽譜とでは違っている場合が多かった。生徒の創意工夫によって表現された旋律を、次につなげるために、そして他者と共有するためにも、記譜力の向上が必要だと感じる。

日々の授業における常時活動として、生徒の記譜力を高めるための取組ができると考える。例えば、リズムから始まり、音の高低をつけた簡単な旋律を記譜させるといった段階を踏んだ学習を計画的に取り入れることで記譜力の向上が期待できる。

（ウ）生徒の変容を見とるための授業改善

完成した楽譜を見ても、それまでの足跡が見えてこないという課題が見えてきた。そのため、生徒がどこで悩み、どこで工夫し、課題を解決していったのかを教師が理解して、次の授業に生かしていくことが十分にできなかった側面がある。生徒がどの場面で旋律を決定していったのか、その根拠は何なのか、という生徒の思考の変容を見とるための授業者の手立てを考えていく必要がある。

例えば、生徒の思考を見とるため、また生徒が自分自身の思考を自覚するためにも、一枚ポートフォリオ評価法を研究、活用したい。

Ⅵ　成果と課題

【成果】

今回の実践では、音楽によって場の雰囲気がつくられることを理解することで、自らの感性を働かせながら他者と協働して、場（卒業式）に合う音楽をつくろうと主体的・協働的に音楽表現に取り組む姿が見られた。そして、自分たちがイメージした音楽にするためにどうしたらよいかを、音そのものや、音にかかわる言葉を用いて仲間と積極的に語り合いながら、場に合った音楽をつくるのに必要な知識・技能を獲得していく姿を見ることができた。さらには、自らが生きる現実世界（卒業式という節目の場）と音楽との関連を見いだし、価値づけていく姿が見られた。これらの姿から、本研究の目的である「生徒が音楽的な感性を働かせ、音楽そのもの、または音や音楽にかかわる言葉で語り合える力を育成する」ことが一定程度達成できたと考える。

さらに卒業式後に行ったアンケート（第１学年 148 名に実施）からは、99%の生徒が「音楽は自分たちの生活を豊かにする」と考え、84%の生徒が「今回の授業における学びは実生活や社会とつながっている」と感じていることが見えてきた。これは、本研究の目指す生徒像に迫る姿だと言える。アンケートにおける生徒の具体的な記述内容は表 6～表 7 の通りである。

表 6　卒業証書授与のＢＧＭとして音楽を聴いた生徒の感想

作曲者ってこんな気持ちで創作してるんだな～と感じました。
元々卒業式をイメージして作ったので、結構卒業式の雰囲気に合っていたなと思います。
友達がつくった曲が流れていて、音符が多いわけでもなかったので、静かでメインの卒業証書授与が目立っていていいと思いました。
先輩達が卒業する悲しさと同時に、自分達が音楽の授業で頑張ったことや工夫したことがよみがえってきて自分たちの思いでも流れていくような感じがした。
本当に自分たちが作った曲なのかなと思うほど、違和感がなく、自然に聞けました。また名作曲者が作った曲ももちろんいい曲だけど、自分たちがつくった曲も負けないぐらいいい曲だと思いました。
卒業式に合っていると思った。リズムがあっていると感じた。他の場所で流したらどうなるのかと思った。

表 7　音や音楽と自分や社会の関わりに関する生徒の記述

とても身近で自分たちがつくった音楽が流れていたから、身近な存在だと感じた。
最初は「自分は音楽とあまり関わっていない」と思っていたけど、創作の授業がスタートして、よくどんなリズムがあるかなと考えていると、ドラマのＢＧＭや電話の着信音などとても身近なところに音楽があって、音楽とたくさん関わっているんだなと思いました。
私は音楽があると、卒業式などがもっと感動的になるし、普段伝える事ができない感謝の気持ちも歌を通してみんなで伝えたりすることができるので、音楽は人を支えたり助けてくれるようなものだと思いました。
卒業式を通して改めて実感したけど、音楽は僕たちの何気ない生活を引き立ててくれる存在なのかなと思いました。例えば、卒業証書授与の時も音楽があったからこそ、あの特別なふんい気になったと思います。

これらの記述からは、自分たちの生活世界にある音楽の存在を改めて認識し、音楽によって「何気ない生活」が引き立てられ、「音楽は生活するうえで、大切」なものなのだと感じていることが伺える。

また、「ただ何となくいい」という抽象的な表現ではなく、表8のように音楽を構成する諸要素が自分たち人間の心への響き方につながっていることを自覚した生徒が出てきたことも成果である。

表8　音楽の諸要素の違いによる曲想や感情の変化に関する生徒の記述

優しい感じの音から音階が上がっていくにつれて、気持ちがこみ上げてくるような所もあって、卒業式に合っていると感じました。
音楽ははんぷくを使って曲のふんいきもあまり変わらずつくることができた。
同じ音を使っても、四分音符にするか、八分音符にするかで大きく印象が変わるということが面白いと思った。
音の高低やリズムによって感じ方が変わるのが面白いと思った。
少しゆっくりひくことで、よりさびしい雰囲気が出ていると思います。
自分たちで考えて作った曲をきくと、自分の個性が感じられる
音楽は、歌や曲によって、リズムや強弱、ふんいきが違うので、その変化を意識しながら音楽をきいたり、ピアノやリコーダーでふいたりしたいです。

また、表9のように感性を働かせ他者と協働しながら音楽表現を生み出すことに前向きに捉える生徒が出てきたことも成果と考える。

表9　他者と協働しながら音楽表現を生み出すことに関する生徒の記述

今まで、卒業式の音楽はプロがつくるものだと思っていたけど、グループでつくることができるというのは面白いと思いました。
また創作の授業から「1人がたくさん頑張るのでなく、全員で意見を出し合ったり、話し合ったりすることで、みんなが満足できるようないいものがつくれる」ということも学ぶことができました。
最初は絶対無理と思ったが、グループと協力してやりきると面白い

【課題】

一方で、実践では音楽用語の知識・理解、記譜法等の技能習得の点で課題が見えた。これらの課題は、生徒が「音楽的な見方・考え方」を働かせて音楽表現していく上で、重要な視点となってくる。卒業式後に行ったアンケートの記述においても、表10のように、「頭の中で考えている」ことを上手く実現するための知識や技能が不足していると感じている生徒が見られた。

表10　授業で「難しいと感じた事」に関する生徒の記述

頭の中で考えているメロディーをすぐに音として表しにくいのが難しいと思った。
頭で思ったことをそのまま表現すること
自分が思っているような音が探せない
なかなか感情と合ったリズムや音程が見つからなかった。
ずっと同じようなものだとだめだと思っていても、あまりリズムをかえることができなかった。
二分音符の中をぬりつぶすとか、白いままとか、こまかい部分が分からなくて書くのが大変でした。
ペアと、創りたい音楽が違ったこと
曲をつくるのはいいが、演奏することが難しいと思った。

生徒が、感性を豊かに働かせて、表現を創意工夫できるようにするためにも、深い実感を伴った音楽的特徴の知覚・感受のさせ方を工夫していく必要がある。そして、知覚・感受したことと結びつけながら音楽用語を理解できるようにしたり、記譜力の向上を図ったりすることが必要となる。また、生徒が音楽表現するプロセスでどのように思考しているのかを見とるためのワークシート等の工夫をはかっていきたいと考える。

Ⅶ　引用文献・参考文献

（1）琉球大学教育学部附属中学校『研究紀要』第29集、2016年

（2）琉球大学教育学部附属中学校『研究紀要』第30集、2017年

（3）勝野頼彦「平成24年度　プロジェクト研究調査研究報告書　社会の変化に対する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理」国立教育政策研究所、2013年

（4）文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』教育芸術社、2018年

（5）沖縄教育委員会　平成30年度版沖縄県学力向上推進プロジェクト授業改善6つの方策、2018年 https://www.pref.okinawa.jp/edu/gimu/jujitsu/shisaku/documents/h30gakuryokuproject.pdf　2018.8.1 取得